



TITLE:

蔡京の科擧・學校政策

AUTHOR(S):

近藤, 一成

CITATION:

近藤, 一成. 蔡京の科擧・學校政策. 東洋史研究 1994, 53(1): 24-49

ISSUE DATE:

1994-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/154478>

RIGHT:

蔡京の科擧・學校政策

近 藤 一 成

はじめに

- 一 蔡京と三舍法
 - 二 天下三舍法の實施
 - 三 天下三舍法の廢止
- おわりに

はじめに

徽宗朝、前後四回十四年半に亙り宰相職を占めた蔡京は、實質二十年近くを權力の中樞で過ごし、その間、自己保全を計りつつ皇帝を籠絡、專權を恣しきままにして遂には北宋を滅亡に追い込んだ元凶とされる。その蔡京が執着した政策の一つに、天下三舍法がある。神宗朝の太學で實施された三舍法を州學にまで及ぼし、地方の州縣學と中央の太學を一貫した學制の下に置き、縣學から州學、州學より太學へ進んだ學生の中から成績優秀な者を選んで官僚に登用しようという制度である。蔡京は、これを鄉舉里選の復活であり、先王建學制の實現であると自贊している。事實、天下三舍法を額面通りに受け取れば、慶曆以來の北宋の科擧改革に通底し、王安石が將來の課題とした取士（科擧）と養士（學校）の一致を初めて實行に移した劃期的な施策であったと言える。しかし、この天下三舍法は、蔡京の三度目の宰相職辭任の翌宣和三年

二月に突然罷められ、また高らかに宣言した科擧の廢止も、「次回は例外として一回のみ實施する」措置を繰り返し、結局中斷することなく行われ、取士と養士の一體化は龍頭蛇尾に終わった感がある。そして何よりも姦臣蔡京の政策全般に對する「四海九州の力を竭して自奉す」（宋史本傳）との評價が、天下三舍法をまともに考察しようという意欲を殺いできたのか、その制度の具體的内容については不明の點が多いように思われる。小論は、先ず蔡京の構想がどのようなものであったかを検討し、次にその實施の狀況と突然の廢止の理由について考える。その際、この制度が、近年強調されるようになった北宋とは異なる南宋社會の特質形成に果たした役割についても指摘しておきたい。

一 蔡京と三舍法

蔡京（一〇四七—一一二六）は、天聖五年（一〇二七）登第の蔡襄、八年の蔡襄を始め兩宋を通じ二三人の進士合格者を出した、福建興化軍仙遊縣の名族蔡氏出身である（南宋寶祐五年修 元重訂『仙溪志』卷三 一門進士第）。父の準は景祐元年（一〇三四）の登第、京本人と弟下は熙寧三年（一〇七〇）の同年、京は恐らく父の蔭によって既に太廟齋郎の官を有していたので、通常よりは有利な鎖廳試經由の合格と思われる。⁽¹⁾この熙寧三年の殿試は、王安石の科擧改革の嚆矢として、從來の詩賦論三題の出題が試験直前になって策問に變更されたり、狀元葉祖洽の順位をめぐる考官の間で議論が紛糾したことで知られる。祖洽の答案は新法を強行する當局に阿諛した文章、というのが時人の評價であった。⁽²⁾蔡京の對策がどのようなものであったか窺うことはできないが、登第後、杭州錢塘縣尉を振り出しに、舒州團練推官を経て熙寧九年には權流內銓主簿として都に戻り、翌年、若手新法派官僚をプールする中書禮房習學公事に入っているから、巧く時流に乗ったと見てよいであろう。⁽³⁾

蔡京の官歴を一瞥して直ちに氣附くことは、神宗・哲宗兩朝に於ける學制整備の作業への關與である。『長編』の記事から關連事項を拾ってみると、先ず元豐二年（一〇七九）十二月乙巳の國子監敕令式並びに學令一四三條の上呈が擧げら

れる（卷三〇一）。これは、神宗朝の太學三舍法を集成したもので、以降、元豐の制と呼ばれて三舍法の基準となる規定である。御史中丞李定に編纂が命ぜられ、蔡京は、畢仲衍、范鏗、張璪とともに編纂官に名を連ねている。尤もこのときは判國子監の張璪が、活動の中心であったようであり、京の果たした役割がどの程度のものかは不明である。元豐の制の内容については、後に検討する。續く元豐三年正月庚寅、今度は檢正中書戸房公事となっていた蔡京に諸路學制編修の命が下った（卷三〇二）。同二月癸卯に權御史中丞李定、判國子監張璪、管勾國子監范鏗にも編修參加が命ぜられているが、任命の経緯から推して今回の編纂の中心人物は京であり、ここで地方學制制定の中心として活動したことが、後に天下三舍法を構想する遙かな背景になったと思われる。次の哲宗朝では、紹聖三年（一〇九六）、翰林學士承旨として國子監條制の詳定に係わり、十二月甲戌に國子監三學と州軍學の學制を太學敕令式二三冊としてまとめ上呈した。これは紹聖新修太學敕令式と呼ばれ、翌四年正月一日をもって頒行された（『考索』二八所引『長編』）。

このように兩朝にあって中央・地方の學制の集成事業に従事した結果、蔡京は當代の學校制度に最も通曉する官僚の一人となったと豫想される。この推測を裏附ける記述が『長編』（卷五一四）にある。元符二年八月癸酉、翰林學士承旨蔡京は宰相章惇、大理少卿劉慶と共に、新修海行敕令格式を進呈した。章惇は上前で「進むる所の表」を讀み上げ、繼いで一帙を取って進讀したが、「其の間、元豐無き所にして元祐敕令を用い修立する」條文が有ったため哲宗の下問が續いた。帝の一連の問に對し、『長編』は「惇等對う」との語で臣下の答を記すが、「太學生、贖を聽す」の條については、「上、新條か、舊條かを問う。京、對う。臣等、參詳して新たに立つ。蓋し州縣の醫生尙お贖を聽すを得。太學生も亦た當に贖を許すべし」と、この箇所のみ應對者を蔡京に特定して記述する。學制に關しては、當然、専門家の蔡京が應えるべき、との雰圍氣があつたのであろう。

ここで太學三舍法について、簡単に整理しておきたい。三舍法に關しては宮崎市定氏の「宋代の太學生生活」で明快な説明がなされて以來、專論ないし解説を含む多くの論考が發表され、近年では袁征『宋代教育』が最も詳細な研究となっ

(4) ている。これらに依り、制度の大枠は把握できるのであるが、個々の具體的な規定となるとなれば理解に苦しむ所がかなりある。以下、蔡京の天下三舍法の前段階という観点から、神宗・哲宗朝の三舍法の特に問題となる部分を中心に、その推移を追ってみる。

まず外舍、内舍、上舍の三舍の由來であるが、外舍については神宗の熙寧元年正月、太學内舍生の定數二百名の他に外舍生百名を置いたことが、その始めである。しかし、このときは入試合格者一五〇人に對し、内舍生の缺員が四、五〇人のみで一〇〇人餘りが入學できず、遠方から上京し長年太學入學を待った士人が空しく歸郷せざるを得ない事態を前に、儒學を振興し人材を育成する朝廷の方針に反するというので採られた措置であった。諫官滕庠、吳申が、太學の齋舍に餘裕があり、百名の定數増は可能であるから、かれらを外舍生として入學を認め入齋聽讀を許すが、内舍生の月三〇〇文の食費は支給せず、内舍に缺員が生ずれば順次外舍生から補充する、との案を提議して受け入れられたのである。従つて外舍生、内舍生の間に明確な進級の規定があるわけではなく、その違いは食費支給の有無に過ぎず、無論上舍の概念も無かつた。(5) やがて王安石の科舉改革が實行に移されるのに伴い、太學にも建物・設備と運営方法兩面での改善、改革が進み、熙寧四年十月に初めて上舍、内舍、外舍の三舍の別とそれぞれの定數、進級制などが規定された。それによると上舍生は百名、内舍生は二百名、外舍生は初め定數が無く、翌熙寧五年八月に七百名とし、學生は一經を選擧し教官である直講に附いて受業する。直講は十員、二人で一經を講じ、毎月學生を試験し、成績優秀者は中書に報告する。上舍生の中から毎經二人を選んで學生、學錄、學諭とし、學行が特に優れた者は、國子監の責任者である主判官と直講が保明して奏聞し、中書が考察し旨を取り官に除す、というものであった。(6) このように、やがては科舉に代え、學校の卒業生を官僚とする安石の方針に沿った形で太學改革が行われたのである。とはいえ、この時點では未だ進級、除官の具體的規定は見えない。それは、蔡京が編修官に名を連ねた先述の元豐二年十二月上呈の學令中で、太學三舍選察陞補の法として詳細が定められることになる。次にその規定を検討したいが、その前に上舍生の處遇について觸れておきたい。

熙寧十年二月十三日、上舍生は入學後、在學が二年に及び第二等以上の罰を犯さなければ、上から三〇人を限度として免解を與える、との詔が出された。更に、貢舉において免解の條件を満たしている者には免省試を一回に限り與え、又た免解を得てから在學二年以上で公私罪を犯さぬ上舍生にも免省試を與える、としている（『宋會要』職官二八國子監⁽⁷⁾）。續いて同年五月乙亥（二十六日）には、免解の條件が在學二年から一年に短縮されている（『長編』二八二）。この規定であると上位三〇名の上舍生は、最短三年で殿試に参加でき、原則として殿試は落第者を出さぬから、殆ど無條件に官に除せられることになる。さすがにこれは、熙寧四年の科舉改革以來顯著になっていた講官と學生の癒着を加速させるなど問題が多く、遂には太學の獄を引き起こし、より嚴密な規定の元豐法の制定へと進んで行く⁽⁸⁾。しかしここに示される、學校を科舉の捷徑とする考えは國初以來のものであり、この後の元豐法にも繼承される注意すべき學校の位置附けである。

『宋會要』職官二八國子監に、神宗正史職官志、哲宗正史職官志と題された國子監の機構、所屬の官員及び職掌、生員や入學、升級について記された部分がある。内容から推して、元豐年間と紹聖年間の制度と思われ、兩者に多少の相違はあるが、元豐の制の史料として利用できる箇所である。先の『長編』三〇一及びほぼ同一内容の『宋會要』職官二八元豐二年十二月十八日の記事と併せ、相互に参照しつつ行論上必要な規定を記すと以下のようである。まず周知のことながら、生員定数は上舍生百名、内舍生三百名、外舍生二千名の計二千四百名、每齋五間三十人收容の寄宿舍八十齋に分宿した。學官は、熙寧と同じく毎經二名の計十名（但し神宗正史は十二名）であるが、名稱は、元豐三年正月十七日に直講から太學博士に改められる（『宋會要』職官二八）。問題は、太學運営の根幹に係わる生員の入學、升級、釋褐に到るまでの規定であろう。入學希望者は、屬する州の發行した證明書を提出し、年四回、孟月に行われる補試（入學試験）を受け、合格すれば外舍に入る。入試は大義一場が課せられた（『宋會要』職官二八國子監元符三年十二月二十一日）。外舍生は、孟月經義、仲月論、季月策で四季ごとに循環する私試と呼ばれる毎月の試験を受ける。この學科と操行の成績を、各齋の學生から選ばれた責任者とその副である齋長・諭が毎月記録し、一季が終わるたびにそれらを通計し成績が出される。その成績の考

察は學諭から始まり、最後の國子監祭酒、司業の判定に到るまで一季かかる。歳終に外舍生二千名中一〇〇名が選ばれ合格點である校定が與えられる。更に年に一度公試といわれる經義・論策の試験がある。公試の成績が一、二等に入つた者は、校定を参照して春秋の二回、内舍に進級させる。内舍生についても同様の私試が課せられたようであるが、歳終の校定は三百名中三〇名であつた。内舍生を上舍に進級させる試験は、間歲に一度行われ、省試の法のように朝廷から試験官が派遣され封彌・謄録する。それは、この試験によって一氣に釋褐する者が出るからである。すなわち上舍進級試験の合格者を優・平に分け、校定の成績と合わせて總合成績を三段階とする。試験、校定共に優を上舍上等として直ちに釋褐を與え、一優一平を中等とし免禮部試、兩平又は一優一否を下等とし免解試を與えるというもの（上舍生推恩の制）であつた。このように三舍法は、現今の學校制の如く一定數の學生が順次進級、卒業するのではなく、上に行くほど少なくなる定數配分の下で缺員數のみを進級させる仕組みであつたから、進級者は當然限定される。實際、紹聖元年（一〇九四）までに上舍上等で釋褐した者は林自一人のみで（『宋會要』職官二八國子監紹聖元年三月九日）、外舍から内舍に進んだ者は、元豐六年三人、七年一四人、八年四人であつた（『長編』三七一元祐元年三月辛未）。元豐の制を見る限り、上舍生には決まつた課程や卒業試験が無く、直ちに官を與えられるか、殿試又は禮部試を待つかのいずれかであつた。一方、太學生は在學期間が一年に及べば太學解試を受験でき（『宋會要』職官二八國子監元祐元年五月二日）、しかも太學解額は元豐二年十二月に五百名、同三年十二月には開封府解額を併せ六百名の多きに及んでいるから（『長編』三〇一十二月戊戌、同三二〇十二月庚午）、學生の入學意圖が奈邊にあつたかは明らかであろう。三舍法の整備にもかかわらず、學校は科擧の補完物として構想され機能していたのである。

その後、元祐年間一時廢止されていた元豐上舍生推恩の制が紹聖元年に復活したとき、官に注する上舍上等は毎年二名以内、中等、下等の免省試、免解試はそれぞれ毎舉五名と二十名以内にと、その人數が明記されている（『宋會要』職官二八國子監同年閏四月七日）。このように哲宗親政の時期はほぼ元豐の制が行われたが、元符二年（一〇九九）の州學に於ける

三舍法實施は、天下三舍法に向けて一步踏みだした注目すべき措置である。『長編』五一八同年十一月乙未の記事によると、このときの中心課題は州學から太學への歲貢生の規定にあった。全國の教授を置く州學では太學三舍法に依つて考選陞補を行う。その三舍生のうち上舍生一名、内舍生二名を毎年太學に送る。上舍生は、その年の十二月中に開封に到り、太學補試を受け合格すれば太學内舍生に充てる。不合格の場合は再試を許し三回受けて合格しなければ州に歸す。その間、太學外舍生の待遇を受け食費を支給される。一方、歲貢の内舍生は、試験無しで太學外舍生に充てられるというものであった。⁽⁹⁾一見、無試験の内舍生より補試を課せられる上舍生の方が厳しい條件のようであるが、太學内舍への入學はそれ以上の優遇措置ということになるのであろう。その他、路の監司一員を選んで學政を擔當させ、州の知事、通判を學校の直接の責任者とするなどの規定が見える。限定されてはいるが、ここに初めて州學と太學が關連付けられ、制度上、地方學の學生が州學から太學を経て釋褐に至る道が開かれたのである。このとき蔡京は翰林學士承旨の地位にあった。史料上、今回の措置に京の名は現れないが、三學外舍補試についてかなり細かな點まで提言している様子などを見ると、⁽¹⁰⁾州學での三舍法實施という重要な改制にかれが無關係であつたとは考えにくい。哲宗朝末までには、蔡京の頭の中に天下三舍法の大きな枠組みが出來上がっていたと見るべきであらう。

二 天下三舍法の實施

崇寧元年（一一〇二）五月、翰林學士承旨から副宰相の尙書左丞に移った蔡京は、七月五日に尙書右僕射兼中書侍郎となり、曾布辭任後一時空白となつていた宰相職を埋めた。續いて就任後未だ間もない八月二十二日、全國並びに學校を置き天下に遍く三舍考選法を施行するよう要請し、同日「興學校詔」が降され天下三舍法が實施される（『宋大詔令集』一五七）。しかし例えば『宋史』職官志五國子監の項は、この天下三舍法を「崇寧元年、宰臣蔡京言う」として上奏の内容を抄録する形で紹介しているが、この記述は、八月二十二日の上奏とそれとは別の十月二十七日の外學に關する上奏を併せ

一つの記事にしているので内容上整合性を缺く箇所があり、天下三舍法の全體像を理解する史料としては必ずしも適當ではない。最も詳しい『會要』や『長編』の記事も、節略が適切でないためもあり内容の確定が困難である。それは、蔡京の提議自體多分に試案的な要素があり、その後度々修正附加され一應の最終案が出るのが崇寧五年になるからである。それ故、本節では崇寧元年から五年にかけての三舍法整備の動きを、前節で見た地方學と太學との關係、特に學生が釋褐に至るまでの過程を中心に整理し、その上でその運用の實際を検討してみる。

崇寧元年八月甲戌（二十二日）の提案は、州縣學の設置と財政基盤の手當、監司・知州・通判の役割、小學の附置、賞罰、外任官子弟の州學での取り扱いなど多岐に亙るが、骨格は學生の升補の規定であらう。⁽¹¹⁾先の元符二年十一月の學制と異なる點は、先ず縣學から州學への進學が制度化されたことである。學生は縣學在學一年になると學長、學諭が行藝を考選し、令佐に報告、審査する。その上で州に上申し、州は知州、通判が審査し教授が其の文藝を試験して州學に入學させる。ここから見る限り、縣學では三舍制を想定していないようである。州學における學生の考選について具體的記述はないが、「太學三舍校試法を以てて刪立頒行せんことを請う」とあり太學三舍法を遵用し、或いは提議の一項に「乞うらくは、並びに學生在學升黜法を立てんことを」とあるので細部は今後の課題としたのであらう。それに對し毎年上舍生一名、内舍生二名を太學に送る元符二年の州學生太學升貢の規定は、大幅に改變されている。升貢の人數について、當時の開封府解額百名のうち五十名を土着人の解額として残し、他の五十名は諸州から太學に送られてくる學生（貢士）數の枠に充當した上で、全國州軍の解額の三分の一を貢士額とする。州軍は、三年毎に州學上舍生を太學に貢し、貢士は太學上舍試に付せられる。但し試験は本來の上舍試とは別枠で行われ、上等で合格した者は太學上舍中等に補す。中等で合格した者は上舍下等、下等合格者は内舍生に、その他は外舍生とする。⁽¹²⁾貢士についての記述はこれだけであるが、元符二年では太學内舍どまりであった歲貢生が、成績によっては直接上舍中等に入學する可能性も出てきた。ここで言う上舍試は、元豐制に於いて閒歲に行われた内舍生が上舍に進むための試験（南宋の舍試）のことであらう。とすれば、上舍中等は免禮

部試、下等は免解試の恩典を受けることになりかなりの優遇である。しかしこの時點では、科擧の廢止は具體的に論議されておらず、州の擧人と貢士の數を二對一の割合とする科擧・學校併用制の提言であつた。兩者を比較すると、上舍試上等に合格しほば注官を手にした貢士を除けば、任官への道は科擧經由が未だ有利のように見える。事實、崇寧三年正月癸巳（紀事本末一二六）には、中書省の言として「月書季改、行藝純備にして方めて入貢に與り、其の選頗る艱」い學校より、その日の成績さえ良ければ合格する科擧に人が集まり、「朝廷教養の意」が失われているので、解試受験には（西、北）五路は一年の州學在學、餘路は半年の條件を付けるように、との要請が見える。しかも餘路の半年には縣學在學期間を含めてよく、それでも在學條件を満たさない取應の人が多ければ學事司に相談して聞奏せよとあるから、天下三舍法に對して世の士人たちは冷淡であつたと言えよう。

州學での三舍法實施を提案した蔡京は、太學についても大幅な改組を構想していた。太學外舍を外學として太學から獨立させることである。將來、科擧を廢止し、擧人に代わつて全國から大量の貢士が送られてきたときの受け皿を用意する措置と思われる。崇寧元年十月戊辰（十七日）の上奏によると、學生數は外舍生より千人多い三千名、五閒三十人收容の齋一〇〇棟、講堂四を備え、從來の太學には内舍生と上舍生を置き、それぞれ定數を倍の六百名と二百名にする計畫であつた。外學には辟雍という名が與えられ、外城南薰門外の用地での建設が始まり、崇寧三年十一月四日に竣工した。⁽¹³⁾こうして縣學、州學、辟雍、太學の順に進級する體制が整うと同年十一月十七日、次回の科擧（崇寧四年解試、五年省試）は舊來通り行うが、以降は全て學校より升貢するとの詔を降し天下三舍法が本格的に動き始めたのである。⁽¹⁴⁾とはいえ先の中書省の言の如く、崇寧元年八月の提言を基底とする學制は、士人を學校に向かわせるためには不十分な所が多かつたらしく、後述するように崇寧四年三月、在學の士を優遇する特別措置を講じている。また崇寧五年七月甲辰の詔の冒頭に「已に指揮を降し學制を舉行す。比ごろ前後の法令を閱するに猶お未だ備わらざる有り。士心を失い或いは因りて煩擾にして學政を害う有るを慮る」と述べ、同年八月乙酉の詔は「學校升貢の法、崇寧四年の指揮有りと雖も、朕朝な夕な省閱するに未

だ詳らかに理を盡くすに至らず。當に増損すべし」として、見直しをした天下三舍法の決定版とも言うべき學令を發布している。崇寧四年の指揮とは、十二月十二日に尙書省が建議し、二十七日に大司成薛昂らが看詳増損した、州學から辟雍への貢士を三年一貢から毎年にする歲貢制と三年の在學を滿たせば殿試に赴かせる制などについての條制であらう（『紀事本末』二二六）。この間、蔡京は崇寧五年二月三日に中太乙宮使を拜して一旦宰相を退き、復歸は翌大觀元年（一一〇七）正月七日であるから、學令修正は京の不在時である。しかしこのとき宰相となった趙挺之は、京と權力を爭った仲だが、熙寧の學制整備に際し若手官僚であつたかれ自身、登、棟二州の教授に選ばれた經歷があり且つ國子司業も務めているので學校制度の改革には前向きであつたと思われる。むしろ學制の後退は、彗星が現れたため元祐姦黨碑を撤去するなど蔡京の政策全般への批判が高まつた五年正月から三月にかけてであり、七月には再び元に戻されている。八月乙酉（二十六日）の學令は、蔡京の學校政策の延長にあると考えてよいであらう。

この學令の最も詳細な記事は、『宋史』選舉志三の記述なので、それに基づき内容を示すと、①縣學生の州學外舍への試補 ②州學上舍生公試 ③州學生の降舍退學 ④州學上舍生の辟雍への貢入 ⑤行能尤異な者の特別貢入 ⑥太學辟雍生の公試 ⑦上舍上舍生らの釋褐 ⑧辟雍生の退學 ⑨有官人の貢士 ⑩隨行親の入學 ⑪太學解額の分配 ⑫太學考察試格の改定 ⑬私試の改定 ⑭三舍考察の比率 となつている。これより大分短い記事が、『長編』（『考索』二八）にも収録されており、主要部は同じだが、五路の武貢士など選舉志に見えない記述がある。當然とはいへ最も詳細な選舉志も學令の全ての條項を載せているわけではなく、また記載された部分も要約というより斷片的な節録で意味が取りにくい。書かれていない事柄をも推測しつつ、縣學生が釋褐に至るまでの過程に絞り、以前とどう異なるのか検討してみる。

①には、「縣學生、學に隸し已に三月に及び、上二等の罰を犯さざれば、次年、州學外舍に試補するを聽す。是れを歲升と名づく」とあり、崇寧元年の在學一年が大幅に短縮されている。毎年正月に行われる試補に合格すれば州學外舍生となる（②）。從來、私試は太學州縣學全て經義・論・策を孟・仲・季月に分けて實施していたが、この學令では仲月に三

場を併試することにし、論の試験日に律義も課せられることになった(13)。州學生の校定は在學生の人數を基準に、内舎は十人に五人、外舎は十人に六人として上中下の三等の籍に分ける(14)。上舎生の公試は、毎年正月に歳升員の補試と同時に往われ、十分の六が合格とされ、成績順に並べ「考察の籍(校定)」と付き合わせる。籍に記載があり公試も合格した者の六分の四を最終合格者とし「差を以て升舎す」とあり(2)、升舎は、④によれば辟雍に貢することであるから、その州の貢額數に合せて貢士が決められた。毎年の貢額は、その州の以前の解額と全國に分配された太學解額の割當分を合計し、それを三分した數である(11)。三分して餘りがあれば、三年目の貢額に加える(『考索』所引『長編』)。貢士は秋に辟雍に向かい、年末までには開封に到着していなければならぬ(4)。翌春の試験を受け辟雍に入るのだが(9)、辟雍生にとって、次のような⑥の規定は、今までに無い新しい條項である。

太學、上舎生を試するは、本科^{もと}學と相并ぶを慮り、試は閒歲を以てす。今、既に科學を罷め、又た諸州、士を歲貢す。其れ改めて歲試を用い、春季毎に太學・辟雍生、悉く公試し同院に混取す。總て五(二三の誤り)百七十四人、四十七人を以て上等と爲し即ちに推恩釋褐す。一百四十人を中等と爲し、士を親策するに遇わば試に入るを許す。一百八十七人を下等と爲し内舎生に補⁽¹⁵⁾す。

「上舎生を試する」とは、先に述べたように太學内舎生を上舎に進級させるための公試のことで、元豐制に基づく。上舎上等は直ちに釋褐の推恩を受けるので、科擧の年を避けて行われる。それを閒歲一試と稱した。今は科擧の廢止を宣言し、州から毎年貢士が送られてくるので、閒歲とする理由はなく毎年の試験に變えるというのである。それだけでなく、今度はこの公試の對象を内舎生に限らず太學・辟雍生の共通試験とし、合格者も區別なく成績順に取る。ということは、極端な場合、年末、都に到着、翌春の辟雍試を受けて合格した貢士が、續けて春季の公試の四十七人内に入り釋褐されるケースも有り得るわけである。實際、『淳熙三山志』二七科名、政和三年釋褐の項の黃觀は、「觀の兄。字は德純。政和二年貢首。奉議郎に終わる」との注があり、福州の首席貢士として入京した黃觀は翌春には釋褐の恩に浴している。ま

た、蔡京が二度目の宰相を罷め、代わった張商英政権下で學官削減、經費節約など學校制の縮小を求めた大觀四年八月戊寅の詔(『考索』二八所引『長編』)のなかに、貢士の上舍試合格を上等十人、中等四十人、下等五十人に制限する記述がある。蔡京が三度目の宰相職に復歸した直後、學制は辭職以前の規定に戻されこの制限も撤廢されたと思われるが、いずれにしても入貢して間もない貢士にも即釋褐の道が用意されたことは、崇寧五年以前との大きな違いである。しかし、同時に同じ公試を受験でき、結果もその成績次第というのであれば、辟雍生と内舎生の區別はどこに意味があるのであろうか。下等合格の場合、辟雍生が内舎に升補されるのに對し、内舎生は再び内舎に留まるのである。また元豐制では、校定と公試の二つが優である内舎生が上舍上等として注官された。私試を基礎とする校定は、⑥の規定ではどのように評價されるのであろうか。⑫は、そのことについて述べる。

太學舊制、止、優平二等を分立するのみ。今自ら欲すらく、辟雍・太學上舍を試して程に中る者をして、皆な察考を參用し、差を以てて升補せしむ。其の考察・試格は悉く上中下三等に分けん。貢士は則ち本州升貢の等第を以ててし、太學内舎は則ち校定の等第を以ててす。上舍試の考、已に定まる毎に、知學及び學官は試に中るの等を以てて籍に參驗し、升細高下を通定す。兩上を上と爲し、一上一中及び兩中を中と爲し、一上一下及び一中(一)下、兩下を下と爲す。……⁽¹⁶⁾

太學舊制すなわち元豐制は、校定、公試ともに合格は優、平二等であるが、今回の學令は上中下の三等に分け、それらの組み合わせによって總合成績を上中下の三段階とする、としている。その具體例が、⑥の上舍試(公試)について述べられており、公試の合格者は考察の籍を參驗して總合成績を決めているのである。考察は、辟雍に入つたばかりの貢士は州の升貢の成績により、内舎生は校定によって三等に分けられる。とすれば、⑥の三百七十四人の合格者の上、中、下三等とは、公試の成績のみによる等級ではなく、貢士の場合は升貢の、既に一年以上在籍する辟雍生及び内舎生は校定の等級を併せた總合成績ということになる。従つて⑥の規定も原則的には、元豐制の私試・公試制を踏襲しており、元豐制では

免解試を與えられた上舎下等合格が、科擧の廢止に伴い内舎生に補すに留まつたのである。その結果、確かに内舎生で下等に合格した者は、原級留置となり辟雍生に比べ分は悪いが、もし不合格を續ければ降舎、更には辟雍退學（退送）といひ、再び州學補試を受けさせられる）になるので、下等合格にも十分意味があったと言ふべきであらう。

『宋史』三七七に傳がある李瑋は、太學時代の經歷が知られる數少ない人物の一人なので、その記事を紹介しつつ上記の釋褐規定を考えてみる。『宋會要』職官二八政和三年（一一一三）七月六日の條に、尙書省の言として以下のようにある。

從事郎陳州教授李瑋の狀を檢會するに、崇寧元年の補試にて太學に入りて自り、四年十一月、父の蔭に緣り大（太）廟齋郎に補せらる。大觀元年第一等にて内舎に升補す。當年累さねて上舎上等の校定を成し、政和元年上舎に赴き第三三人、合に釋褐すべき人數たり。朝旨を承け、合に殿試を候つべし、と。政和二年の殿試にて第一等上舎及第を賜る。伏して學令節文を觀るに、諸そ有官の貢士、試に附し合格する者、上等は二等の差遣を升す。及び同年の有官附試上等人李綱、已に推恩を蒙り了れば、當に李瑋に詔し李綱の例に依りて承務郎を與え、仍お國子博士に除すべし。⁽¹⁷⁾

本傳は、「政和の進士の第に登る」とするが、正確には『會要』の如く上舎及第である。李瑋の要求は、父の蔭によって既に太廟齋郎の官を有し上舎上等に及第したのであるから、學令の規定により陳州教授ではなく二等上の差遣を與えて欲しい、というものであった。翟汝文『忠惠集』三に除國子博士制が收められているので、尙書省の言は入れられているが、ここで問題にしたいのは、そこに到るまでの過程である。崇寧元年、太學に入學してから一〇年かけ釋褐に至った李瑋の場合、注意すべき狀況が二つある。一つは、太學入學時には未だ天下三舍法の升補制が行われていなかった。従つて從來の外舎に入り、その外舎在學中に辟雍が完成したことである。崇寧元年十月の蔡京の提議は、在學中の外舎生は辟雍が完成してからその處遇を決めるとしていた。李瑋の大觀元年の内舎への升補は、第一等、則ち公試の成績が第一、二等の者という元豐法に依っているので、舊外舎生は、辟雍完成後も舊法の升補規定が適用されたことが窺える。次の上舎上等候校

表 崇寧二年～宣和二年進士、上舍合格者數等

	知貢舉任命	殿試	賜及第	合格者數	備考
崇寧二年	正月一八日	三月八日	三月二十四日	五三八	
三年	一	一	十一月四日	一六	辟雍竣工、行幸
四年	一	一	九月二日	三五	
五年	正月五日	三月八日 CD二日	三月二七日	六七一	
大觀元年	一	一	六月一八日	CD 二九 AF 四〇	
二年	正月二三日	一	三月二八日	CD A 五一 D 一三	
三年	正月六日	三月六日	三月二日	B 七三一 六八五	
四年	正月一九日	一	三月二八日	一五	
政和元年	正月一九日	一	一	一	即時釋褐の中止
二年	正月八日	三月二日	三月二日	D 七二〇 七二三	即時釋褐の復活
三年	正月一九日	三月一日	三月二日	一九	以降殿試年以外の殿試の項は、Dによる上舍試合格奏名日
四年	正月二三日	二月四日	二月一日	一七	
五年	正月六日	三月九日	三月二三日	六七〇	

六年	閏正月二日	三月 八日	三月一九日	一一	
七年	正月二日	三月一六日	三月二二日	一二	
重和元年	一	三月一六日	三月二六日	七八三 D七八〇	
宣和元年	正月二日	三月一三日	三月二五日	五四	
二年	正月二二日	二月	三月 二日	CD 二一 AF 六六	

A『宋會要』選舉一貢舉 B『宋會要』選舉七親試 C『宋史』本紀 D『太平治蹟統類』二八 E『文獻通考』三三二 F『十朝綱要』一五

知貢舉任命は禮部試ないし上舍試のためで、主にAによる。殿試は殿試日ないし上舍試合格者奏名日でBCDによる。賜及第日はCDによる。合格者数はABCDEに記述があるものにより、數字が異なる場合のみ史料を附記した。

定は、内舍生が上舍試に合格したときに參驗される内舍での校定が上等という意味であろうから、これは崇寧五年令の上中下三等制に依ったものである。二つめは、政和元年の上舍試が第三位で、これは當然上等の成績であろうから考察の上等と併せ兩上、すなわち總合成績も上等となり即釋褐であるが、朝旨により殿試を待ったことである。これは先述の張商英の學校縮小政策の一環として大觀四年八月己卯に出された、上等の貢士が校定だけを參考にし廷試を経ないことは神宗の意志に反するので中等と共に殿試を待たせよ、との詔（『考索』二七所引『長編』）に依る措置である。この結果、李璆は翌政和二年の殿試を受け第一等上舍及第を賜ったのである。上舍上等も三年に一度の殿試を待たせる規定は、政和二年五月蔡京が復歸し、直ちに大觀三年四月以前の歳升法に戻したので、政和元年は、天下三舍法實施期間中唯一の上舍及第を出さない年となった。

崇寧五年令は度々微修正を加えられるが、その骨格部分は、學生が縣學から州學に進み、州は毎年升貢生を辟雍に送

り、太學・辟雍は學生を毎春の共通公試で釋褐・殿試待ち・内舎に振分け、朝廷は三年に一度殿試を行うことにあったと理解できる。今、崇寧二年から宣和二年までの進士、上舎合格者數をまとめてみると表のようになる。崇寧三年の「合格貢士」(『宋會要』選舉一貢舉)一六名は、十一月四日辟雍竣工に際しての推恩。同四年の三五名は九月二十一日に合格を賜っているが、上舎試が秋にあったのか或いは同月四日の九鼎赦文(『宋大詔令集』一四九)に關係があるのか理由は不明。また大觀元年は、崇寧五年令の最初の實施年であり、蔡京が正月に二度目の宰相復歸を果たしたばかりということもあって、合格が六月になったのであろう。その後は、概ね五年令の規定通り春季に上舎試が行われている。本節の最後に、科舉・學校制併用の問題に觸れておく。

科舉廢止が宣言された崇寧三年十一月以降、天下三舍法が罷められる宣和三年二月まで、崇寧五年、大觀三年、政和二年、同五年、同八(重和元年)の都合五回、殿試が實施されている。このうち崇寧五年は、科舉廢止の詔の中に明言されているように、從來通り科舉による取士が行われたから、殿試の對象は上舎中等を含みながらも禮部奏名進士が大部分であったろう。また大觀二年は貢額の三分の一を解額とする科舉が實施されており、同三年の殿試は禮部奏名進士と太學・辟雍生が混在していたと思われる。政和二年の場合は、大觀四年五月の星變に應じた反蔡京派毛注の獻言によって學校七分、科舉三分の割合での取士が行われているので、事情は大觀三年と同じであった。⁽¹⁸⁾残りの政和五年と八年の二回については検討を要する。蔡京が三度目の宰相に復歸した直後の政和二年五月壬申(十六日)「参じうるに科舉を以てし、縣學歲陞の法を罷むるは便に非らず」との上言を受け、「今自り並びに大觀三年四月以前の指揮に依り、其の後降せる指揮は更に施行せず」との詔が出ているからである(『紀事本末』一二六)。またそれ以降、特に科舉を參用せよとの記事も檢索できない。しかし『宋會要』選舉四考試條制政和五年三月十六日には、

臣僚言う、伏して見るに朝廷、法を設け士を取ること最も嚴密爲り。陛下、昨に睿旨を降し、試院は皇城司をして察事の親事官二十人を差わしむるも、唯だ貢士の學院、別試所は未だ親事官を差わし察視せしむる明文有らず。別試所

の引試、宗學、太學、辟雍、武舉并びに開封府學三舍生の人數少なからず。貢舉と事體異なる無し。若し關防を爲すに預らざれば、他日玩習し復た姦弊を容るを深く慮る、と。之れに従い、六人を差⁽¹⁹⁾わす。

とあり、臣僚は貢士の舉院、別試所と試院を區別して擧げている。この年は三月九日に殿試が行われ、二十三日の「賜禮部奏名進士出身六百七十人」(『宋史』本紀二)を前にしての上言と措置であつた。この本紀の記述は慣用的な表現と言へるが、上言中の貢士の舉院は上舍試を意味し、試院が禮部試を指すと考えられる。従つて、上言はこの年に行われた禮部試と上舍試を念頭に置いた發言であり、政和五年も科舉・學校併用であつたと思われる。『文獻通考』三二宋登科記總目が、大觀三年から政和八年までは上舍魁と狀元の兩者に分けて名前を記載すること、『嘉泰吳興志』一七進士題名の政和五年、八年の項が、崇寧五年から政和二年までと同じく何名かに上舍の注を付け進士と區別していることなどを考え合わせると、政和八年を含め五回の殿試はいずれも科舉禮部試の奏名進士をも對象としていた、すなわち科舉は完全には廢止されなかつたのである。

三 天下三舍法の廢止

科舉は全廢されなかつたとはいへ、取士の主要経路は、大觀から政和年間にかけて確實に學校へ移行していった。それにもかかわらず、天下三舍法は、宣和三年(一一二二)二月二十日、元豐舊制に戻る形で突然罷められる(『宋會要』職官二八)。宋人の認識によると、その理由は財政上の問題にあつた。曾慥『高齋漫錄』が「崇寧初め、蔡京事を用う。章公惇、客に謂いて曰く、蔡元長(京)必ず三舍を行わん。奈何、と。客曰く、三舍にて士を取るは、周官賓興の法。相公何すれぞ取らざるや、と。章曰く、正に人の家の百金の産有るが如し。其の半ばを以て門客に請い弟子に教うるは、是れ美事ならざるに非らず。但、家計當に何如。聞く者、以て知言と爲す。」⁽²⁰⁾と傳える、章惇と客の對話はその典型である。朱熹も名高い「學校貢舉私議」(『朱文公文集』六九)の中で、州學の三舍法施行は財政的に困難だとしている。⁽²¹⁾しかし、小論

ではもう一つ別の原因を指摘してみたい。それは、學生に與えられた優免權である。但し財政問題、優免權いずれにしても、天下三舍法^下での學生數が大きく影響してくるから、先ずその數を検討しなければならない。

從來、徽宗朝の學生數としては、二一萬餘員を擧げることが多く、それは『續資治通鑑長編拾補』二四崇寧三年末に附された割注の以下の記述に據っている。⁽²²⁾

……治述統類引羅靖雜記崇寧三年罷科舉、三年歲貢法成、三舍天下教養人爲士二十一萬餘員、爲屋九萬二十餘楹、費錢三百四十萬緡、米五十五萬餘石。

『長編拾補』は、『太平治蹟統類』の引く『羅靖雜記』の記事を紹介しているのであるが、『治蹟統類』二八は、これを崇寧四年十月丙辰に繫けている。また『羅靖雜記』については、詳細不明である。ところが、『古今源流至論』續集一〇州縣學の割注に、

崇寧三年罷科舉、五年歲貢法成、三舍天下教養之士二十一萬餘員、爲屋九萬一千餘楹、貫錢三百四十餘萬緡、米五十五萬餘石。

とあり、同一史料に基づくと思われる二つの記事に、幾つか數字の違いが見られる。前節で述べたように、科舉廢止の宣言は崇寧三年十一月、三歲一貢から歲貢になったのが崇寧四年十二月、歲貢法の完成は崇寧五年令からであるから、『治蹟統類』の「三年歲貢法成」は誤りで『源流至論』の五年が正しい。建物も『治蹟統類』の九萬二十は、千の一畫が離れたもので九萬一千が本來の數字であつたと思われる。とすれば、學生數は二十一萬ではなく十一萬餘員が正しいのではない。實は『羅靖雜記』と『古今源流至論』兩者の記述の原史料と推測できる記事がある。『考索』二七崇寧三年十一月甲戌の條に引く『長編』大觀二年正月一日御製辟雍記である。その一節に、

……今天下被教養之惠凡一十一萬餘人、爲屋以居之凡萬一千餘楹、計其所費錢二百四十一萬餘貫、穀五十五萬餘石。とあり、この一句、徽宗は政府が掌握していた數字に基づき執筆したと考えられる。『考索』は、『源流至論』と同じく

坊刻本のため印刷が悪く誤りも多い。爲屋の部分の凡は丸とも讀めるが、原字は九か或いは凡だとすれば九が落ちてゐるに違ひない。このように數字はとくに誤り易いが、三つの史料を照らし合わせれば、學生數は一一萬餘員ということになる。また、この辟雍記は大觀二年正月朔日に書かれてゐるので、數値は崇寧三、四年ではなく大觀元年のものとするのが妥當である。

次に葛勝仲『丹陽集』一乞以學書上御府并藏辟雍箚子（政和三年上書）には、大觀三年末の學生、學舍、學錢、學糧など禮部が編纂した統計數値が載せられてゐる。それに依ると、學生數は小學を含め一六萬七六二二人、學舍九萬五二九八楹、學錢の收入三〇五萬八八七二緡、支出二六七萬八八七緡、學糧の收入六四萬二九一石、支出三三萬七九四四石などとなつてゐる。更に、學生數を示す史料がもう一つあり、政和六年十一月十五日の學生懷挾代筆監司互察御筆手詔（『宋大詔令集』一五七）には、二〇萬人としてゐる。

以上の學生數に關する三つの史料を並べると、大觀元年（一一〇七）に一一萬餘、二年後の大觀三年に一六萬八千弱、更に六年後の政和六年に二〇萬と約一〇年で倍增したことが分かる。前節で見たように崇寧三年の段階では、學校に人氣なく政府は學生を増やす對策に苦慮してゐたのであるから、崇寧四、五年から急激に増加したと考えられる。一方、崇寧二年から宣和二年までの合格者を全員上舍出身と假定しても、年平均にすれば及第を與えられる者は二四〇名に過ぎない。實際には科舉經由の及第者がかなりゐるので、二〇萬の學生に對し〇、一二％以下の合格率である。大多數の學生にとり、釋褐は實現不可能な目標であつた。それにもかかわらずここに於いて學生數の急増がみられることは、科舉廢止宣言によつて應學者が學校に流れたというだけでは説明が付かない。政府の學生増加策が效果的であつたと言ふべきであらう。その學生増加策とは、崇寧四年三月戊戌（一日）の『長編』（『考索』二八）に、

詔す、應る學生の試補し已に學に入り、試を経て能く場を終るは身丁を免じ、外舍自り内舍に升るは本戸の役を免じ、上舍に升るは本戸の役を免ずるの外、仍お諸般の借借を免ず。其の應舉して免丁を得る人は自から舊に依れ、

(23)
と。

とある、役法上の優免權付與である。この規定については、既に高橋芳郎氏が、宋代における士人身分の確立を論ずる中で取り上げられており、刑法上の特典とともに無位無官の讀書人に與えられ、一般民戸と官僚士大夫の中間に位置する士人の指標とされる⁽²⁴⁾。重要な指摘であると思われるので、ここでは氏の考説を参照しながら、小論の文脈の中でその意義を捉え直してみたい。三月一日の規定は、一箇月半後の四月壬午(十五日)の詔で若干修正され、州縣學に入學し、公・私試を経た學生、州學であれば外舍生は身丁(本人の役)が免除され、内舍生はその上で更に各種の借借(強制借り上げ)を免除、上舍生は官戸の法に依ることになった。官戸の法に依るとは、三月一日の上舍生に對する「本戸の役、諸般の借借を免ずる」に同じであろう。一般的に官戸は差役科配を減免されていた⁽²⁵⁾。州縣學生に對する優免の構想は、既に神宗熙寧元年上奏の程顥請修學校尊師儒取士箚子の中に示されているが、實施されたという確證は未だ見ない。その本格的導入は崇寧年間のこととしてよいであろう。その結果を少し追ってみると、『文獻通考』四六郡國鄉黨之學政和七年(一一一七)の條に、

給事中毛友言、比ごろ郡に守たり。役を訴うる者の言を見るに、富家の子弟、初めより書を知らず、第だ數百緡錢を捐し、人に試補を求め學に入り、遂に身役を免がる。比いて其の歲升中らざるも、更に數年にして始めて籍を除かるれば、則ち其の免がること已に多きを俸いとす。請うらくは、初めて試補し縣學に入る人は並びに簾試し以て僞冒を別たん、と。之れに従う⁽²⁶⁾。

とあり、優免目當ての不正の横行が知られる。同じ記事が『宋會要』崇儒二郡縣學政和七年九月十七日では、「給事中毛友(友)言、乞うらくは、應ゆる補試入學の人、並びに州學の如く簾試し、縣學生、應に歲升試に預りて止だ身丁を免ぜん、と。之れに従う⁽²⁷⁾。」とあり、政府は縣學生に對し、州學同様長官による學力確認試験の簾試を實施し、歲升試を受験して初めて免役特權を與える對策を立てている。また學生數について、『紀事本末』一二六大觀元年十二月壬午(一日)。

には、「建州浦城縣丞徐秉哲、一官を遷す。縣學生、籍に係る者千餘人、此れ一路の最多にして、秉哲考校の事を専らにするを以て、提舉學事司、優獎を加えんことを乞う。故に是の命有り。」とあり、州縣學生への優免付與から二年も経たずして一〇〇〇人を超える學生を抱える縣まで出現した。その浦城縣が屬する建州でも政和四年に一三二八人の州學生を有しており、『宋會要』崇儒二同年九月十五日）、こうして、政和六年末には全國の州縣學生數が二〇萬人に達したのである。

優免を與えたことにより州縣學には學生が殺到した。人々を學校に向かわせる目的は、確かに果たされた。しかし、今度はそのことが天下三舍法を危うくして行く。浦城縣の場合、福建から江東、兩浙へ出入りする交通の要衝に位置し、建州一の十郷の規模をもつとはいえ、『元豐九域志』九、山閒盆地の一つの縣に優免權を得た學生が一〇〇〇人も出現するとすると末端行政の混亂は必至であろう。宣和二年六月二十七日の詔は「縣學の給食及び州縣小學或いは武學、醫學、八行の貢士の給券は並びに罷め、見に身丁、借借を免れ官戸の法に依る者は元豐進士の法に依り施行せよ。」とし、經費の削減と同時に優免の大幅な制限を實施している。元豐進士の法は詳びらかにできないが、得解の舉人に與えられた身丁免除に限ろうというのであろう。⁽²⁹⁾しかしこの建て直しにもかかわらず、この詔の八箇月後に天下三舍法自體が廢止されてしまう。その一箇月後、『考索』二七が引く『實錄』宣和三年三月辛酉（二十六日）の條には、

臣僚上言す、三舍法行われて自り、繫籍の學生並びに差科を免る。是れを以て兼井上戸の家皆な子弟を遣わし學に入らしめんとするも、人人俊彦に非らず。往往にして厚科・假手を以て庠序を濫す。其れ中下の戸、差科倍增し、老幼、州縣に旁午す。力むるも給す能わざれば或いは逃亡に至る。今、舍法既に罷む。乞うらくは更に差科を免るを許さざらんことを、と。之れに従う。⁽³⁰⁾

とあり、州縣學生の免役特權は最終的に廢された。不正の横行、學生數の急激な増加による郷村の役負擔の著しい偏り、これらが財政難と共に天下三舍法廢止の原因となったことは、この史料からも十分窺える。

北宋と異なる南宋社會の歴史的特質の一つに、士大夫の地域社會への關心の増大が指摘されている。⁽³¹⁾確かに中央志向が希薄で地域に密着した士大夫の姿は、南宋史料にしばしば見出される。こうした地域指導者とも言うべき地方の有力者は、多様な形態を取って存在し、必ずしも寄居や退休などの有官者とは限らない。高橋氏が前掲論文で挙げられた無位無官の士人も地域有力者層の一角を占め、鄉村現實に好惡兩面の影響を与え得る立場にあった。氏はこれら士人が、獨自の法律上の身分を獲得していた例證として、舉人、生員に與えられた優免權を検討し、前節でみた役法上の特典とともに刑法上の優遇措置の實例を數多く示されている。それら『清明集』を中心に引用された南宋の事例の中で、小論に即すると、特に「教刑」の概念に興味が惹かれる。高橋氏が「州縣學の自訟齋における一定期間の強制的な學習改過」と言われるように、士人の犯罪者が士人であるが故、本刑の代わりに、本來、州縣學の學生が學規や輕微な犯罪を犯した場合に收容される自訟齋で「聽讀」何か月の罰に處せられることである。正規の刑具の杖に代え、竹篋で打たれることを伴う記事も散見⁽³²⁾される。教刑の適用には準據すべき法令は無く地方官の自由裁量に任せられ、しかも教刑の對象となる士人は、舉人や前生員に限らず、地方官が詩賦や讀書の素養有りと判斷し、「儒」とか「士」と認めればよいのであるから、士人の底邊はかなり廣くなる。

南宋時代、官僚士大夫と一般庶民とも區別され、その中間に位置した士人への刑罰が學生のそれになぞらえて行われたことは、何を示唆するであろうか。州學、縣學が遍く普及し、自訟齋が附置され、州縣學生が大量に出現した時期を経過しなければ起こらぬ現象と言えないであろうか。天下三舍法下の政和學規の一つに、「州縣學生、學に在りて杖以下犯す有らば學規に従い、徒以上若しくは外に在りて犯す有らば並びに法に依りて斷罪す」⁽³³⁾とある（『宋會要』崇儒二政和三年六月

庚申）。本來學生を對象とする規定が、學校を出て廣く一般の士人に適用される事態が生じたのである。役法上の特典を求

め州縣學に大量流入した學生は、天下三舍法廢止以後の地域に密着した士人と同じ階層に屬すると言えよう。とすれば、南宋社會が特定の形態を取って出現する契機の一つは、徽宗朝の天下三舍法にあったと言えるであらう。蔡京の科擧・學校政策は、建前上の目的の實現には程遠かったが、宋代社會に與えた影響から見れば看過できない歴史的意義を有する。小論で觸れ得なかった、兩宋交替期に國家の方向を決定付けた徽宗朝上舍出身の爲政者たちの行動形態に、かれらの太學時代の經驗がどのように影響したのかという問題とともに今後の課題である。

註

本稿では『宋會要輯稿』を『宋會要』、『續資治通鑑長編』を『長編』、『續資治通鑑長編紀事本末』を『紀事本末』、『山堂先生羣書考索後集』を『考索』、中嶋敏編『宋史選舉志譯註(一)』(『東洋文庫 一九九一』)を『譯註(一)』と略稱する。

(1) 蔡條『鐵圍山叢談』三。條は、蔡襄を伯父、京の弟下を叔父と呼んでおり(同書四)、蔡一族の系譜については検討が必要である。なお、準の墓は、杭州臨平山にある(清 張大昌『臨平補記補遺』一)。

(2) 近藤一成『王安石の科擧改革をめぐる』(『東洋史研究』四六一三 一九八七)参照。

(3) 『宋史』四七二本傳。『長編』二七七熙寧九年七月壬戌。同二八三熙寧十年七月壬申。

(4) 宮崎市定『宋代の太學生生活』上下(『史料』一六一・四 一九三二、『全集』一〇所收)、王建秋『宋代太學與太學生』(中國學術著作獎勵委員會 一九六五)、袁征『宋代教

育』(廣東高等教育出版社 一九九一)など。『宋より明清に至る科擧・官僚制とその社會的基盤の研究(平成二・三年度科擧研究費補助金研究成果報告書 中嶋敏研究代表)』には、科擧學校關係の文獻目錄(稿)が收録されている。

(5) 『宋會要』職官二八國子監熙寧元年正月に「諫官滕庠言、慶曆中太學內舍生二百員、並官給日食。近年每人只月支錢三百文添厨、其餘自造。比舊所費殊寡。即今補試諸生一百五十人、方撥四五十人入學足二百員。其餘試中未入學者、尙百餘人。遠方孤寒、待次多日、却歸鄉里、奔馳道路。今太學齋舍空閑甚多。欲乞增置生員一百人作三百數。況本監歲收租課、足以供贍。又諫官吳申言、今太學生徒以二百人爲限。其數蓋狹、遠方之士、逾年待次。伏乞學生不限員數、庶使齋儒日盛、流化天下。詔、申、庠再參定。申等欲於內舍生二百人外、增一百員、名外舍生。逐旋補試、且令入齋聽讀、仍不破官中貼厨錢。侯內舍生有闕、即將外舍生撥填。如此則有廣朝廷育才之意、亦不違先降學制。從之。」とある。前掲宮崎論

文は、當時『宋會要』を利用できなかったためか、『玉海』一一二の記事を引かれ、原文の外舍生を上舍生に改めて解されたが、外舍生が正しい。

- (6) 『宋會要』崇儒一太學熙寧四年十月十七日、『長編』二二七熙寧四年十月戊辰など。

- (7) 『文獻通考』四二熙寧八年の項には「太學安惇等、已升上舍皆特免解。其自發解者即免禮部試。時三舍未有推恩定法、故特降命也」とある。

- (8) 前掲註(2)拙稿では、太學の獄を元豐制施行に向けての必然的措施としたが、むしろこの獄が元豐制制定の契機となったと考えるべきかも知れぬ。

- (9) 「詔、諸州置教授者、學生依太學三舍法考選陞補。內上舍生每歲貢一人、內舍生每歲貢二人。上舍生、限當年十二月到京、隨太學補試。合格者、與充內舍生。不合格者、許再試、三經試不中者遣還。內舍生、不候試與充外舍。諸州貢上舍生到京、並權破外舍生食。諸路各選監司一員提舉學校。仍令知通專管勾。諸州試內舍上舍、並監司選差有出身官一員、與教官同考試。仍彌封謄錄合用條貫、令于國子監取索行下。其外州不可行者、比類條具申尙書省。」

- (10) 『長編』四八五紹聖四年四月丁亥に「翰林學士承旨蔡京言、三學補試外舍法、春以三月、秋以八月。今來太學公試亦是同月。竊慮參雜。詔、補試外舍生、春用正月、秋以七月。」とある。

- (11) 『宋會要』崇儒二郡縣學崇寧元年八月二十二日、『紀事本末』一二六州縣學崇寧元年八月甲戌。

- (12) 『宋會要』職官二八國子監崇寧元年十月二十七日には「若試中上等補充太學上舍、試中等下等者補充內舍、餘爲外舍生。……」とあり、合格中等の扱いが前註の記事と異なるが、こちらには衍字、脫字の可能性がある。

- (13) 『考索』二八『長編』崇寧元年十月戊辰(十七日)、前註(12)の『宋會要』。辟雍の竣工については、『譯註(一)』本文二二六註二を参照。

- (14) 『宋會要』崇儒二郡縣學、同選舉四考試條制、『考索』二八『長編』崇寧三年十一月丁亥など。

- (15) 「太學試上舍生、本慮與科舉相并、試以閒歲。今既罷科舉、又諸州歲貢士、其改用歲試。每春季、太學・辟雍生悉公試、同院混取、總五百七十四人。以四十七人爲上等、即推恩釋褐。一百四十人爲中等、遇親策士許入試。一百八十七人爲下等、補內舍生。」

- (16) 「太學舊制、止分立優・平二等。自今欲令辟雍・太學試上舍中程者、皆參用察考、以差升補。其考察試格、悉分上中下三等。貢士則以本州升貢等第、太學內舍則以校定等第。每上舍試考已定、知舉及學官以中試之等參驗子籍、通定升細高下、兩上爲上、一上一中及兩中爲中、一上一下及一中下、兩下爲下。……」

- (17) 「尙書省言、檢會從事郎陳州教授李瑒狀、自崇寧元年補試入太學、四年十一月緣父蔭補大(太)廟齋郎、大觀元年第一等升補內舍、當年累成上舍上學校定、政和元年赴上舍第三人合釋褐人數、承朝旨合候殿試、政和二年殿試賜第一等上舍及第、伏覩學令節文、諸有官貢士附試合格者、上等升二等差

遣、及同年有官附試上等人李綱、已蒙推恩了。當詔李瑋依李綱例與承務郎仍除國子博士。」

- (18) 科舉廢止宣言後の、以上の學校・科舉併用については、『譯註(一)』本文一二六註四及び一二七、一二八兩條の本文、註を參照。

- (19) 「臣僚言、伏見朝廷設法取士最為嚴密。陛下昨降睿旨、試院令皇城司差察事親事官二十人。唯貢士學院別試所、未有差親事官察視明文。別試所引試、宗學、太學、辟雍、武學并開封府學三舍生人數不少、與貢舉事體無異、若不預為關防、深慮他日玩習復容姦弊。從之、差六人。」

- (20) 「崇寧初、蔡京用事。章公惇謂客曰、蔡元長必行三舍、奈何。客曰、三舍取士、周官賓興之法。相公何為不取。章曰、正如人家有百金之產、以其半請門客教弟子、非不是美事、但家計當何如。聞者以為知言。」

- (21) 「……又欲斟酌舉行崇寧州縣三舍之法、而使歲貢選士於大學。其說雖若賢於混補之云、然果行此則士之求入乎州學者必衆、而今州郡之學錢糧有限。將廣其額則食不足。將仍其舊則其勢之偏選之艱難而塗之狹、又將有甚於前日解額少而無所容也。」

- (22) 川上恭司「宋代の都市と教育——州縣學を中心に——」(梅原郁編『中國近世の都市と文化』所載 京都大學人文科學研究所 一九八四) John W. Chaffee, *The Thorny Gates of Learning in Sung China*, Cambridge University Press, 1985, p. 226, Note 63.

- (23) 「詔、應學生試補已入學、經試能終場免身丁、自外舍升內

舍免本戶役、升上舍免本戶役外、仍免諸般借借。其應舉得免丁人自依舊。」

- (24) 高橋芳郎「宋代の士人身分について」(『史林』六九—三一八九六)。

- (25) 『慶元條法事類』四八賦役門 支移折變、同 科數。なお、借借については、宮崎市定「借借の解」(同『アジア史研究』四)所收 一九六四、『全集』二三) 參照。

- (26) 「給事中毛友言、比守郡見訴役者言、富家子弟初不知書、第捐數百緡、求人試補入學、遂免身役。比其歲升不中、更數年而始除籍、則其俸免已多矣。請初試補入縣學人、並簾試以別僞冒。從之。」

- (27) 「給事中毛友言、乞應補試入學之人、並如州學簾試、縣學生應預歲升試、止免身丁。從之。」

- (28) 『宋會要』崇儒二「詔、縣學給食、及州縣小學或武學醫學八行貢士給券、並罷。見免身丁措借依官戶法者、依元豐進士法施行。」

- (29) 高橋氏は、註(24)論文に於いて、註(23)の「其應舉得免丁人自依舊」を、「科舉廢止以前に舉人の資格を得ていた者は、舊來通り丁役を免除する」という意味にはかならず、役法上の舉人の資格が固定化した終身資格であったことを示すものである」と解された。しかし、崇寧三年十一月、科舉廢止とともに、次回の科舉は從來通り行うという通達が出されていることを考えると、この句は、四年解試の舉人は舊來通り身役を免除する、との意味にも取れ、この記事だけでは終身資格があったと斷定することはできないように思われる。

(30) 「臣僚上言、自三舍法行、繫籍學生並免差科。以是兼并上戸之家、皆遭子弟入學、非人人俊彥也。往往以厚科假手濫庠序。其中下之戸差科倍增、老幼旁午於州縣。力不能給、或至逃亡。今舍法既罷、乞不許更免差科。從之。」

(31) Robert P. Hymes, *Statesmen and Gentlemen: The Elite of Fu-Chou, Chin-Hsi, in Northern and Southern Sung*, Cambridge University Press, 1986.

(32) 竹篋で打つことゝ、學規に由來すると考えられる。宮崎前

掲註(4)論文、周密『癸辛雜識』後集學規參照。

(33) 「州縣學生、有犯在學校以下從學規、徒以上若在外有犯並依法斷罪。」

〔附記〕小論は、中嶋敏先生主宰「宋史選舉志研究會」での討論に多くを負っている。貴重な意見を賜った參會者諸氏に深甚なる謝意を表したい。但し文責は言うまでもなく筆者にある。

A STUDY OF CAI JING'S 蔡京 EDUCATIONAL POLICY AND THE CIVIL SERVICE EXAMINATIONS

KONDO Kazunari

In 1102 the new prime minister Cai Jing extended the national university's three hall system 太學三舍法 in the capital to the prefectural schools. This nationwide three hall system placed the provincial, prefectural, and county schools together with the national university under a single school system. The result was that students who progressed successfully through this three-tiered educational system were selected as officials. This new policy was a pathbreaking initiative that drew heavily on the reforms of the examination system instituted during the Qing-li 慶曆 period. It also realized what Wang Anshi 王安石 had considered to be a necessary reform in Song government—the fusion of the formerly distinct activities of teaching students and selecting them as officials. This new system was discontinued in 1121 due to fiscal problems and to the confusion it caused at the lowest level of the administrative hierarchy in the provinces. The institution of the new system had dramatically increased the number of students exempted from corvée labor from 110,000 in 1107 to 168,000 in 1109 and to 200,000 in 1116. This large concentration of corvée-exempt students was a significant factor in Southern Song local society. In this aspect lies the significance of Cai Jing's educational policy.

A STUDY ON GENG DINGXIANG 耿定向 AND ZHANG JUZHENG 張居正

NAKA Sumio

Geng Dingxiang (1524—1598) adopted as his fundamental principle, the notion of Burongyi 不容已, the explanation and approbation of the